福井県庭球協会の　あゆみ

昭和３３年、福井県庭球協会が結成された当時、これといった加盟団体もなく、庭球をする者もほとんどが役員であったが、現在では、加盟団体１５、登録人員４００人となり、国体、全国的大会等を支障なく運営できる協会と、大きく成長したことは、まことに今昔の感にたえない。こうして、本協会は、今も限りない前進を続けている。

昭和３３年、福井国体開催の実現を目増し、未組織協会をなくすため、福井県体育協会長であり、福井県軟式式庭球連盟会長の島田博道氏の力いれにより、会長に島田博道、理事長に牧祐二が就任し、小さいながら、その第一歩をふみ出した。

牧理事長は、昭和３５年転勤されるまで、わずかの期間ではあったが、在任中は福井クラブを結成するなど、福井県庭球界の普及に努め、転勤後も本協会にカップの寄贈、埼玉国体出場の際は、東京における練習コートの世話など、離福後も本庭球協会発展のため尽力され、本協会の草分けともなった。現在も東京の東伏見クラブで括躍申である。

昭和３４年、現協会副会長　藤宗寛治（福井大学工学部教授）および阪部光男（福井大学初代庭球部長）両氏の奔走により福井大学に庭球部が発足した。コートは福井大学正門脇に２面でき、まわりを桜に囲まれた非常に環境のよいコートであった。このコートを中心に福井大学庭球部は順調に育ち、その後、本庭球協会の手足となり、その発展に大きく貢献した。又、このコートを中心にして、牧理事長、野崎理事の働きにより、福井クラブが結成され、その後の福井市の庭球普及のための大きな母体となった。

当時、昭和３４年の協会加盟団体は前述の福井大学、福井クラブに加えて、東洋紡績敦賀工場の三団体である。行事も確たるものもなく、クラブ対抗を行なった程度で、その年の決算は36，000円と記録されている。

この年の役員は、次のとおりである。

会　長　　島田　博道（医　師）
副会長　　江本　翠　（興国織染）
〃　　亀田　正春（東洋紡績敦賀）
理事長　　牧　　祐二（富国生命）
理　事　　三宅　淳一（歯科医）
〃　　野崎　徹也（北陸電力）
理事　太上　孝夫（東洋紡績敦賀）
〃　　長谷　健市（土牧繊維）
〃　　松本甲子郎（大島産業）
〃　　藤田　稔雄（大同生命）
〃　　阪部　光男（福井大学）
監事　斉藤　猛（勧業銀行）
〃　　和田松太郎（東洋紡績敦賀）

昭和３５年、牧理事長の転任に伴い、三宅淳一が理事長に就任した。

三宅理事長は、協会発足当時から理事として活動し、今日の協会を築きあげ、現在も協会の支柱として活躍している。

この年、福井で開催された北陸三県総合体育大会庭球競技（オープン競技）に出場して、第２位に終ったが、県内選手は、初の県外チームとの対戦にもかかわらず、よく健闘した。県内では、協会主催大会として、春季福井県庭球大会を開催、一時中断したが、昭和45年より再開し、春のシーズンを飾るにふさわしい大会となっている。

昭和３６年、朝日生命テニス教室を福井市で開催した。初めてのテニス教室の開催にあたって、会場決定、ポスターはり等、その昔労は大変であったが、全日本ランキングプレーヤーの来福もあって、福井県の庭球界に大きな刺戟を与えた。このテニス教室は、昭和４１年まで毎年開催され、福井県庭球界の技術向上及び底辺拡大に寄与すること大であった。

この年、県内における最も権威ある大会として第１回福井県庭球選手権大会を開催した。又、対外試合として、国体北信越第２次予選に、東レ金津を中心とした一般男子が初めて出場した。東レ金津はこの年テニスクラブが誕生し、その後の県内の各大会のほとんどのタイトルをとり、昭和４４年頃まで、福井県の庭球界に君臨した。

昭和３７年、県内の高校に庭球部がないため国体開催に支障をきたすので、高校に庭球部を結成する気運が盛りあがる。

昭和３８年、敦賀工業高校に庭球部が誕生、初めて福井県に高校の庭球部ができた。敦賀工業高校は、その後の福井県の高校庭球界をリードし、福井工業高校．武生商業高校等、各高校の台頭をよんだ。

この年、国体北信越第２次予選に一般女子も出場した。一方、大学においては、福井大学の米沢秀夫が、北陸学生庭球選手権においてシングルスで準優勝し、全日本学生庭球選手権大会に初めて出場した。福井大学庭球部発足５年にしての出場であり、その後は、村上、藤原、白

井、長谷川等を送り出し、福井大学のレベルが、北陸の他大学のレベルに追いついた年であった。

昭和３９年、福井県高体連庭球部が県協会に加盟するとともに、加盟各校の尽力により高校の行事が大巾にふえ、高校庭球界の発展の基礎をつくり、敦賀工業高校、水上先生の活躍により、現在では、全国でも有数の庭球普及県にとなっている。

昭和４０年、県民体育大会の一般男子の部がこの年から郡市対抗となり、七郡市が出場するとともに、国体北信越第２次予選に、前年の高校男子に競き、高校女子も出場し、全種目北信越第２次予選に出場できるようになり、ようやく全県的な普及のきざしが見えてきた。

この年の秋、朝日生命の異動により、慶応大学の往年の名プレーヤー南貴晴氏が来福され、その技術は、今まで接したことのないほど高度なものであり、目を見張らさせるものがあった。南氏は、昭和４３年までの在福中は、県庭球選手権シングルスに優勝するなど、自からも率先して競技をするとともに、国体選手の強化には良きコーチとなって、本県庭球界の技術向上に努めた。

昭和４１年、この年の暮、国体の中心会場となる福井運動公園に待望の庭球場が、１２面完成した。このコートは全国的にめずらしい全天僕型のキノタイトコートであり、この種のコートが１２面も備えているのは全国でも初めてのことで、全国より注目を集めた。又、このコートは、コート面がすべらないため、足腰には余分の負担がかかるが、反面、雑なプレーはできず、どうしても基本に忠実なプレーをしなければならず、球足はクレーコートより速いため、近代的攻めのテニスにマッチしたコートであるといえる。

このコートの完成は、専用の硬式テニスコートの少ない本県の庭球界にとって活気的な出来事であり、本県の庭球界が全国的に飛躍するための大きな土台となり、その後の本県の庭球競技の選手強化に大きな力を与え、翌年の高校男女の国体出場、それ以後の高校男子の国体連続出場活躍にと、その基盤となったのである。

昭和４２年、３月北陸では初めての室内庭球選手権大会を、福井市・福井市教育委員会・福井市体育協会の力添えにより開催することができ、冬季間における強化を兼ねている。現在も非常に盛大に開催されている。

８月には、北陸少年少女庭球選手権大会、９月初旬、国体北信越第２次予選、9月末、K・S杯、東西対抗庭球大会と、国体開催を翌年に控え、そのリハーサルを兼ねて、全国的、地域的大会がいろいろ開催された。特にK・S杯東西対抗庭球大会は、全国のランキンクグプレーヤーが出場し、福井県庭球人の目の前にトップ・レベルのその洗練されたすばらしいプレーを存分に見せてくれた豪華な大会であり、この運営の成功が、そのまま国体への成功へとつながったのである。又、その前に開催された国体北信越第２次予選には、地元の利もあったか、８月に開催された北陸少年少女庭球選手権大会において完備なきまでにたたきのめされた本県の高校選手が、わずかの期間によく立ち直り、その気力において力の差を打ち破り、高校男女が国体出場権を初めて確保した記念すべき年であった。協会発足以来実に１０年にして初の国体出場がかなったのである。

１０月には、前理事長の牧氏が来福され、カップを寄贈されたので、これを記念して牧杯争奪福井県混合庭球選手権大金を開催し、牧夫妻を混えて第１回大会を１０日に行ない、牧夫人の活躍により、第１同大会は、見事牧夫妻が優勝したのである。

昭和43年、国体開催を１０月に控えて、6月北信越高等学校庭球大会を、国体リハーサルとして、国体会場である福井運動公園庭球場にて開催し、福井国体の主力メンバーでしめる武生商業が、男子、女子とも優勝するという快挙をなしとげたのである。

１０月、県民の聴力を結集した福井国体は成功裡に終了したが、本庭球競技も、そのもてる力を十二分に出し、記録においてほ、中央との力の差をまざまざとみせつけられ、不本意な結果になったが、その運営は、一糸乱れることなく、見事に運営できたことほ、とりもなおさず、これからの協会運営に大きな自信を植えつけてくれた。

国体終了後、昭和４４年になると、県内の行事も、一般、高校と広範囲に渡ってふえ、今では、新しい行事は開催するのが困難なほどに競技人口とも充実してきたのである。

これまでは、福井県庭球協会の基礎づくりであったが、国体を転期として、その作業も終ったといってもよいであろう。

国体を成功させ、幼年期を小さな歩幅ながら堅実にすごしてきた本庭球協会は、青年期へ脱皮をはかっていくため、その若さを前面におし出し、大きく前進することを願って、今日も歩みつづけているのである。